

さんだんのうた

■ 楽曲データ

歌詞：仏典意識

楽曲：伊藤完夫 作曲

発表：－

初演：－

初出：－

管理番号：M0968

■ 創作の経緯

1940年代の終わり頃、京都女子学園の礼拝用音楽として作曲される。歌詞は、蓮如上人450回遠忌の記念事業として行われた意識勤行（讃仏偈の意識）。1950（昭和25）年頃には朝の礼拝で採用されていたといわれている。

■ 校訂報告

校訂譜：『聖歌・讃歌集』第1巻収録

底資料：『聖歌』 浄土真宗本願寺派学校連合会 1963年

比較資料：『聖歌集 エレクトーン用』 京都女子学園仏教文化研究所 1968年

校訂の詳細：特記事項なし

■ 解説

戦後まもなく、1948（昭和23）年に蓮如上人の450回忌法要が本願寺において厳修されます。その記念事業として、現代語でおつとめできるようにと、正信偈や讃仏偈などの意識勤行が制定されました。それが、「しんじんのうた」（正信偈の意識）、「さんだんのうた」（讃仏偈の意識）、「ちかいのうた」（重誓偈の意識）、「らいはいのうた」（十二礼の意識）です。これに、伊藤完夫が曲をつけ、音楽礼拝として歌われるようになりました。

◆ 作曲家について

伊藤完夫さんは、1906（明治39）年、愛知県生まれの作曲家・オルガニストです。1928（昭和3）年から10年ほど、東京市（当時）の公立小学校などに勤めながら、演奏活動を行いました。

ことに、1931（昭和6）年からは、理学博士の田中正平たなかしょうへいに師事し、音響学・純正調オルガン奏法・日本音楽理論を学んでいます。

戦後の1948（昭和23）年に、増山顕珠ますやまけんじゆ京都女子大学学長に招かれて同大学の講師をつとめ、1964（昭和39）年に教授となり、数々の仏教讃歌を作曲しま

した。1988（昭和63）年には、仏教伝道協会の仏教伝道功労賞を受賞しています。また、武蔵野女子大教授も歴任し、築地本願寺のオルガニストもつとめました。

この《さんだんのうた》は、伊藤さんが京都女子大に赴任当時、仏教讃歌による勤行として試作を重ねるなか、1950（昭和25）年頃には、献華偈・献灯偈・献香偈（いずれも伊藤完夫作曲）・敬礼文・三帰依文等と組み合わせて、音楽礼拝として朝の礼拝などに使用されるようになりました。

私事ですが、筆者は1966（昭和43）年に龍谷大学に入学しました。その当ても《献香偈》《敬礼文》《三帰依》《さんだんのうた》《念仏》という組み合わせで、朝の音楽礼拝が行われていました。このような勤行もあるのかと、とても新鮮で感銘深いおつとめでした。

◆テキストについて

前述のように、『仏説無量寿経』上巻に出てくる「讃仏偈」の意識です。

久遠の仏が法蔵菩薩となってあらわれ、師の仏である世自在王仏を讃え、すべての迷えるものを救おうという願をおこされた。そして、たとい苦難の毒に沈もうとも、かならずやりとげねばやまない誓われているこの偈のなかには阿弥陀如来の願心がつらぬかれている（『浄土真宗聖典—勤行集』解説より）

歌う前に、讃仏偈全体の意味と、意識の言葉をよく読んで理解することが大切です。

本来は20番まですべて歌うことが大切ですが、いくつかを抜粋して歌ってもよいでしょう。一般的には、1～3番を歌ったり、1～3番に最後の20番を加えたり、さまざまな方法があります。みなさんで工夫してください。

◆歌い方について

- ①音楽礼拝（法要）における経段ですから、粗雑にならないようなテンポを見つけてください。
- ②4拍目から始まる、いわゆる「弱起」の曲ですが、日本語の発音は原則として単語の頭にアクセントがありますので、発音ははっきりと歌いましょう。
- ③2小節目の「ラ」→「ド」の音程を正確に、ずりあげないように気をつけましょう。
- ④3小節目・5小節目の8分音符を滑らかに歌えるように練習しましょう。
- ⑤8小節目から9小節目の「ソ」→「ド」の音程を正確に取りましょう。ここから11小節目にかけて高音域が続きます。ことに10小節目の「ミ」に移るときがなかなか大変です。十分に練習しましょう。
- ⑥11小節目の下降音階でも気を抜かずに、12小節目の2分音符までフォルテ（強く）のまま歌いましょう。
- ⑦15小節目からの下降音階もピッチが下がらないように、気をつけましょう。音が沈み込まないように、練習しましょう。

解説執筆：大分哲照（御堂演奏会指揮者 福岡教区西嘉穂組明圓寺住職）

※本解説は、「メロディーの宝石箱」No. 57（仏教婦人会総連盟機関誌『めぐみ』第184号収録）を加筆・修正のうえ、転載。

Copyright: Jodo Shinshu Hongwanji-ha Research Institute. All Rights Reserved.